

一心寺かわら版

第四十二号 平成三十年一月発行

ホームページ・ブログ・フェイスブックは「持名山一心寺」で検索

謹賀新年



旧年中は当山の護持運営にご協力いただき

誠に有難うございました

本年もよろしくお願い申し上げます

南無阿弥陀仏



失ってはじめて気づく今のわが身のありがたさ

昨年の漢字に「北」

が選ばれました。北朝鮮のミサイル発射や核実験の強行、九州北部豪雨、北海道産のじやがいもの不作、北海道日本ハムの大谷翔平選手や清宮幸太郎選手、競馬キタサンブラックなどが選ばれた理由として挙げられたといえます。

しかし、「北」が昨年の一字と言われても何だかピンとこないのは私だけでしょうか。二位は「政」だったようで、こちらの方がしっくり来る気がします。

昨年を振り返るのも大切ですが、年も明けたことですし、今年のことを考えていきましょう。昔は小学校で書初めをしていたように思いますが、現在はどうでしょうか。今年の始まりにあたって一筆書くとしたら皆さまはどんな字を選びますか。

「失ってはじめて気づく今のわが身のありがたさ」

本年の柱掛け法語の言葉です。その通りと頷かれる方も多いでしょう。この「今」ということに注目して考えたいと思います。



仏教の一説に、すべての存在は「刹那」(刹那の長さについては諸説あるが、指をひとはじきする間に六十五刹那あるとか、一刹那は七十五分の一秒であるなどと言われている)の間に生成消滅を繰り返すものであるという考え方があります。今消滅したものの(A)と同じものはありませんが、それを因として、また相續しつつ次の刹那に新たなもの(A)の存在が生じるといいます。

刹那というと、「刹那的な生き方」などと否定的に捉えられることが多いかもしれませんが。過去や将来を考えず、ただこの瞬間を充実すれば足りるとする考え方だとすれば良くないことでしょう。

しかし、刹那という考えを生み出した仏教のものと意味に戻って考えれば、それは案外、素晴らしい考え方だと思えます。「一瞬一瞬を大切に作る、その時を本当に充実して生きる生き方」と言い換えることができるでしょう。

「今(刹那)だけよければ過去や将来はどうでもよい」という否定的な態度ではなく、「今(刹那)がよくなければ過去も将来もよくなる」という積極的な態度です。



仏教は過去、未来、現在という三世を説きます。今の連続が未来と呼ばれるものになり、過ぎ去った今が過去になります。過去の自分が今の自分、過去とは別の自分を作り、今の自分が未来の自分、今とは別の自分を作るのです。先人は「いのちまいにちあたらしい」とも表現されました。

よく大人は子供に向かって、「将来のために今は我慢して頑張りなさい」というようなことを言います。しかし、いくら将来のためとはいえ、今我慢しなければならぬことは辛いことです。

同じような意味ですが、「将来のために苦しいかもしれないけれども今を一生懸命生きることが大切なんだ」と言うと、少し積極的に受け取ることができるかもしれません。勉強するということが苦しい(今)かもしれませんが、目的(未来)さえはつきりしていれば、それは我慢ではなく、満足に繋がるはずですよ。

さて、浄土真宗の教えについて「死んだ後に極楽浄土に往生する教えでしょう、今の私には関係ない、役に立たない」と考える方がおられます。本当にそうでしょうか。

仏教を説かれたお釈迦さまは、真理に目覚めることによって生老病死、諸行無常の中にあつて苦しみを離れてさとり境地に至られました。浄土真宗も道程は異なっていますが同じくさとりの道を教えています。

確かに浄土に往生するのは未来ですが、それによって今、救われるのです。煩惱によって苦悩させられることのない、すべてのいのちが光り輝く「俱会一処」(ともに一つのところで会う)の浄土に生まれ、先に往生された方々とお会いすることができるということです。人生を精一杯生きるといふことに力を与えるのでしよう。

また、今、救われるからこそ、未来も救われるとも言えます。今、浄土往生間違いなしと聞くことができてこそ、すでに人生を終えた親しい人が先に仏さまになられていること、私も未来に仏となることが素直にいただけるのでしょうか。

そして、今、救われるからこそ、過去も救われるのです。今が大切、有難いということは後になってみないと気付かないことが多いものです。失敗したと思うこと、やり直したいと思うことがたくさんあるでしょう。しかし、「ドラえもん」のようにタイムマシンで過去に戻ってやり直すことはできません。

「過去は変えられない。しかし、意味を変えることはできる」と教えられました。過去を振り返ってそれを今に生かしていくことによって、意味のあるものにしていくことはできます。今救われたならば、今までのことはすべて有意義であったと受け取ることができるようです。



今、私は、阿弥陀仏から浄土に生まれよと願われ、間違いなく救うと誓われている。それを「有難い」と喜び、「このような私」とと慚愧しつつ、「帰っていく世界がある」と安心して精一杯生きていくことを先人は「今、救われた」と表現してきたのでしょうか。

仏教は、今、大切なことを教えてくれるものなのです。

秋季永代経報告

ようやく涼しくなり秋の気配が漂い始めた中の秋季永代経。納骨堂、本堂でお勤めのあと、法話は中原大導師（高松市大乘寺）によるピアノを交えての音楽法話。

浄土真宗は阿弥陀さまにおまかせする、「季節の移ろぎにただただ応じるのみ。年月の移ろぎにもただただ応じるのみ」という心境が生まれる。その仏さまの教えをオリジナルソングによって表現されました。

メジャー曲、かりゆし58の「アンマー」（沖縄の方言で母のこと）。

「アンマーよ、アナタは私の全てを許し、全てを信じ全てを包み込んで、惜しみもせずにも何もかもを、私の上に注ぎ続けてきたのに、アンマーよ、私はそれも気付かずに思いのままに過ごしてきたのでした…」と歌い上げ、この曲の母心が仏の心に通じていると話されました。

そして最後は竹内まりあの「いのちの歌」。今日話したことはすべてこの詩に込められています、とのこと。

「本当にだいたいなもの隠れて見えない。ささやかすぎる日々の中にかげがえない喜びがある。いつかは誰でもこの星にさよならをする時が来るけれど、命は継がれてゆく。生まれてきたこと、育ててもらえたこと、出会ったこと、笑ったこと、そのすべてにありがとう。この命にありがとう」。



真宗教団連合香川県支部間法大会報告

法話楽団「迦陵頻伽」。ギター、ピアノ、フルートの演奏をバックに西脇顕真氏が歌い、「念仏者の生き方」を語りました。

「里の秋」「浜千鳥」「バラが咲いた」、その声と詞が心に沁みわたります。「日本文化から仏教を取ったら何も残らない」とおっしゃった方もおられます。

浄土真宗は何も特別な生き方をしなさいとは説きません。ありのままの自分でありながら、お念仏の中に真実を見つめて感謝の暮しをする。そういうものだからこそ長きに亘って多くの人々がその教えを喜び、その精神が、古くから歌い継がれる曲に通ずるものが多いのかもしれない。

本年の行事予定

一月八日	宗祖報恩講
三月二十三〜二十五日	よるしるべ&よるしらべ
三月下旬	春季永代経
五月下旬	おてらくご
九月中旬	総代世話人会
九月下旬	秋季永代経
十月中旬	報恩講参り
十二月三十一日	除夜会



仏教マンガ説法①〜鬼の太鼓〜

六道輪廻（仏教では生きとし生ける者が経巡る世界に天、人、修羅、畜生、餓鬼、地獄の六つあると考える）のうちの一つである「修羅道」。

いわゆる戦いの世界ですが、昔の「十界図」「六道図」などを見ると、剣や弓で戦う武者のそばに、太鼓を叩いている鬼が描かれています。あたかも太鼓で戦いを鼓舞するかのようですが、おそらく鬼にとっては、どちらが勝っても負けてもかまわないのでしよう。戦いが長引くこと自体が、鬼の喜びになっているのかもしれないね。

緊迫の続く現在の世界情勢ですが、ひよつとすると、戦いが長引くと喜ぶ鬼が、今もどこかで太鼓を叩いて囃したてているのかもしれないよ。

（佐々木正祥）

